



## お江戸舟遊び瓦版 1149 (1)号

水彩都市江東 ころろ美しい日本の再生 安全・安心まちづくり

お江戸観光エコシティ・お江戸舟遊びの会 江東区千田 13-10

## 小松由佳「シリアの家族 (1)」 集英社 25. 11. 30

## 第1章 逃避行 2012年5月 パルミラ

- 二人は半年近く、逃亡生活を送っていた。遊牧民のテントで寝泊まりし、数日おきに居場所を変え、日中は身を隠し夜陰に紛れて移動した。
- サーメルとジャマールが運動に参加したのは2011年3月だ。市民の自由を奪い抑圧を続けてきたアサド政権は、こうした動きに危機感を抱き軍隊を投入して弾圧を加えた。2012年武力衝突が激化した。
- サーメルは家族に一目会いたいとパルミラの実家に人目を避けて戻った。家族は再開に涙した。その日の午後、15人ほどの家族がリビングに集まった。父と母と彼が聖典を読み、祈りをささげている最中に、7、8人の秘密警察が乱入し、連行された。サーメルは祈りを途中でやめず、抵抗しなかった。



## 第2章 アブドゥラティーフ一家 2008年10月 パルミラ

- 近代に入るまで、一家の祖先は砂漠に暮らす遊牧民ベドウィンで季節ごとに砂漠を移動した。初めて会った頃、父ガーセムは70代初めで、堂々たる体躯と風格は健全で、子供たちの尊敬されていた。ガーセムが生まれたのは1930年代、フランスの委任統治領時代のシリアだった。現在の国境線がない時代だった。祖先たちは我々よりも、ずっと広い世界に生きていた。
- 一家に出会ったのは2008年、私はそれまで夢中になっていたヒマラヤ登山から写真家を目指したばかりだった。風土に根ざした人間の暮らしに惹かれ、エジプトやイラク、イランなどの中東の砂漠を歩き、シリアのパルミラで一家に出会った。放牧の仕事を撮影させてもらい、家にも滞在するようになった。そこには男性の世界と女性の世界があった。成長するにつれて、家族以外の未婚の男女の接触を避けるよう徹底的に配慮される。親しい友人でも互いの異性の兄弟姉妹の名や顔を知ることはなかった。
- 私は2008年以降も一家を訪ねた。2011年以降、シリアは民主化運動の拡大と、政権による武力弾圧に端を発し、内戦状態へと突入し、一家もパルミラでの暮らしを失っていった。2013年一家の6男が逮捕されて1年目、12男ラドワンとヨルダンで再開した。彼は難民になっていた。
- 私がそこを訪れたのは、ラドワンと結婚する為だった。ラドワンとは一家の放牧の取材を通し、互いを知るようになった。私たちは次第に互いを意識するようになり、ラドワンの父ガーセムはたしなめた。年を経れば自分の文化に帰属する時が来て共に暮らすのは難しいよと。

## 第3章 海を渡る移民たち 2023年12月 ドーバー海峡

- 10日ほど前、フランスで取材したばかりのシリア人移民が、ドーバー海峡で溺死したことでショックのあまりよく眠れなくなった。ドーバー海峡ではボートの転覆事故が多発していた。小さなボートで海を渡る旅がいかにか命がけの行為であると知っていても、私たちは豪華な安全な船に乗り安全委イギリスへ渡ることができた。

## 第4章 砂漠へ、ラクダの乳を搾りに 2021年5月 トルコ

- 屈強な体を持ち、馬やラクダを自在に乗りこなしたガーセムと友人の2人は今や80代半ばとなっていた。身の回りの一切を息子に任せ、一日座って過ごしていた。2人の祖国シリアはすぐそこにあるが、足を踏み入れることはできなかった。ガーセムは「砂漠に行って、ラクダの乳を搾って来るよ」と冗談を言い、庭に出て行ったが、そのまま長い旅に出た一。
- かつてその美しさから「砂漠のバラ」と謳われたオアシスの街パルミラ。ガーセムは早くに

父を失くし、貧しい子供時代を過ごした。家計を支えるために10歳になる前から物売りをし、成長し建築現場で働き、請け負った先の娘に恋した結婚、23人の子どもが生まれたが、幼くして7人が亡くなった。70歳まで100頭近くのラクダを増やし、一家は総勢70人の大家族となった。大家族の暮らしを愛し、誇りを抱いて暮らし、家族は幸せの源であり、大切だった。

- それまでがあまりにも幸せだったために、シリアが内戦状態になり、一家の劇的な変化は耐え難いものだった。2015年、過激派組織ISがパルミラを占領し、ガーセム一家は土地から土地へと避難生活が始まり、ラッカに移動した。ISは過激な宗教観に陶酔した荒くれ集団だった。
- ラッカでは激しい空爆があり、2016年ガーセム一家は隣国トルコへ入国した。息子たちは食肉解体業者や精肉店、食料品店で働き、得意分野を開拓し、2020年、街の郊外に土地を買った。
- トルコに移動した後のガーセムは、私に会うたびに、「パルミラのオリーブ園で一緒に草刈りをしたね」と言い、「パルミラの女たちは普通草刈りをしないが、君は進んで草刈りをした。それ以来、君を気に入ったんだよ」。一家がトルコで安定したことにガーセムは安どしていた。
- 2020年コロナウイルス感染が拡大し、トルコも例外ではなかった。その年、私は取材でトルコへ行き、ガーセムに会った。ガーセムは「やるべきことがあるだろう。働け働け、生きる道は自分で開拓せよ」と活を入れられた。取材を終え帰国の挨拶を告げに行き、翌朝握手をした。その2日後にガーセムは旅立った。

#### 第5章 パルミラへの道 2022年9月 シリア

- 変わり果てたまちの光景に、言葉を失った。私は写真家として10年程トルコ南部の難民コミュニティを取材してきた。故郷に帰りたいと願う難民たちの思いとは対照的に、シリア情勢は多種多様な外部勢力の介入によって複雑化し、帰還の見通しは立たないままだった。
- 私のパルミラへの取材は、家族のルーツの記憶に結び付いていた。夫ラドワンが生まれ育ち、わずか数年で日常が失われた土地だった。ラドワンは市民に弾圧を加えることへの罪悪感から2012年政府軍を脱走し、シリアから逃れた。脱走兵には重罪が科されるため、アサド政権が倒れない限り、二度とシリアの地を踏めない身だった。私は事あることにラドワンから、故郷のパルミラの青々としたオアシスの緑、こんこんと湧き出す水について聞いていた。今や失われたものであったが、パルミラは私の心の奥深くまで浸透していた。
- シリアに行くなら2022年内でなければならぬと思った。ロシアによるウクライナ侵攻が始まったからだ。家族の事情もあった。結婚10年を迎え、夫との夫婦関係には不穏な空気が漂うようになり、「親族訪問ビザ」が申請できないからでもあり、2人の子どもはトルコで難民として暮らす親族に預かってもらいたいからだ。
- 2022年9月、私はトルコからレバノンを経由し、シリアへと向かった。2人の子どもはトルコの夫の親族と滞在中の夫に預かってもらった。2年ぶりのシリア、パルミラを撮りたいという気持ちだったが、この国では一時も気を抜いてはいけなかった。ホテルに到着の翌朝、日本にいる父から「危険なので即時シリアから退避するように」とメールが入っていた。タクシーに乗るも、どこもかしこも撮影禁止だった。パルミラに着くも、市街地は息をのむ光景だった。タクシーの助手席に男性が突然乗り込んできたが、秘密警察だった。現在のパルミラを撮る目的でやってきたが、政府は市街地を見られ、写真に撮られることを極端に警戒していた。
- 電話で夫は「彼らは自分の親族だが、絶対に信じてはいけない。パルミラに残ることを選んだ人たちだから。政府が市民を弾圧するのを見て見ぬふりをするか、積極的に協力してきたかの々々だから。心のきれいな人は皆パルミラから離れたよ」と話した。
- せっかくここまで来たのに、写真を撮れずに終わるのは避けたかった。追いつめられた私は、最後の手段に出た。タクシーを呼び、秘密警察に交渉を試みた。「私の夫の実家を見たいのです」との頑固な交渉に「いいだろう。ほんの少しだけだ」と、2人の秘密警察がやってきた。町の中心から1kmの地に夫の父ガーセムの家はひっそりと残っていた。鉄の窓枠や扉が略奪され、黒い穴となっていた。私はガーセムの家の外観を撮影した。家の中には何も残っていなかった。